

足袋について

奥平 志づ江
原 ますみ

1. まえがき

服装の中で最も歴史の浅いのが履物であることは、未だに原始的な生活をしている未開の人々を見れば明らかである。服装文化も進み、他の文化と同様に必要に応じて生活環境の厳しい所から進み、最後に履物に及んだことが容易に推測できる。したがって最初の履物が何時、何処で使われたかを知ることは困難であるが、狩猟文化が農耕文化に先んじたと判断すれば、その原型は動物の皮を用いたもので、その後はそれぞれの自然環境と生活様式にともなって、発展したものと考えられる。ギリシヤ、ローマ時代の喜劇役者が履いた皮の軽い靴 (Socks) が風俗文化の発達と共に繊維織り靴下に変り、日本では奈良朝の頃から富裕階級に使われた^{ソックス}襪 (指股のあいていない革製の外履き)(図

1) が現在の足袋の原型といわれる。足袋、靴下とも原型の形状、材質は同様であったが、足袋は併用する履物と共に大きく変わったわけである。又、服飾品は服装の主体となる衣服に適合するように工夫されたものであるから、洋服と和服のそれが異なることは当然で、足袋は和服にコーディネートするユニークな履物である。足袋はその字の通り、足の袋であり、又、靴下 (Socks・Stockngs) も同様、足の袋である。両者とも足の保護、保温を目的

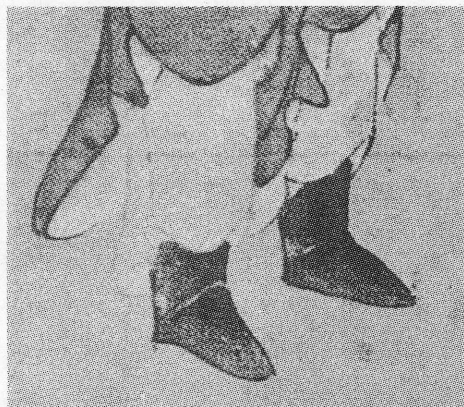


図1 襪

として、同一の単純な原型から、併用される履物に適應するように発展、分化したもので、鼻緒ずれ、靴ずれから皮膚を護り、足の防汚に役立つ、いわゆる履物の下着的役割をもつようになったことも同様である。筒部の長さも、用途、衣服、履物に適合するように変化したことは、長ズボンにはソックスを、スカートやニッカボカースにはストッキングを、鳶職、火消しは長足袋をと使い分けしたことでわかる。靴下と足袋の大きな相異点はその構造 (指股のあるなし) と布地であるが、最近では草履と靴の何れにも

適用できるタビックスも市販されている。足袋の長所は指股による機能性である。軽くて足にフィットするので、単独に外履きとして使用でき、高所や狭い場所での作業にも適している。以下足袋について知り得たことを若干述べる。

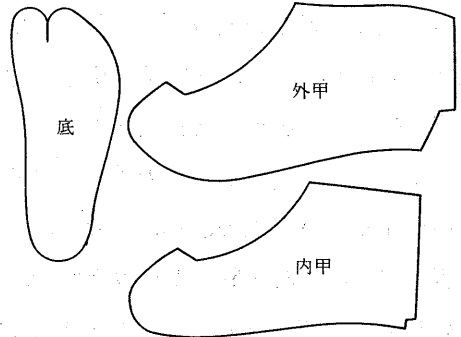
2. 足袋の歴史

足袋の原型と言われる襪は奈良朝以前から存在したと言われ、これは鹿の一枚皮の半靴（筒のない浅い靴）であったから、単皮（タンピ）とも呼ばれ、これがタビになったとの説もある。又、承平年間（931～938）の「和名類聚鈔」には多鼻^{タビ}の文字が用いられている。室町時代から安土桃山時代までは紫が流行し、婦女子は紫の革足袋や、小桜小紋など模様のあるものも履いたといわれる。色足袋は今もなお歌舞伎、舞踊、狂言に名残りをとどめている。寛永16年の鎖国令にもとづく輸入革の不足と明暦3年の江戸大火後、革類が不足したので、木綿の紐足袋が庶民の間に普及するようになった。又、この頃町人が廓通^{クラワ}いに使った紙足袋は「一夜足袋」ともいわれた。木綿足袋は革と違って、臭いがなく履き心地が良いので、身分や男女の区別なく用いられた。

3. 足袋の構造

足袋は甲と底からできており、甲は内甲（親指側）と外甲（4本指側）に分かれている。（図2、足袋の構造）その留め具も紐からボタン、コハゼと変った。最近、栃木県の宇津家より発見された足袋は多種多様の形状、材質からなり、明治初期は足袋のデザイン上の変革期であったと考えられる。

図2 足袋の構造



4. 足袋の種類

次に足袋をその留具、構造、用途別に類別し、その特徴について述べる。

(1) 紐足袋

紐足袋は紐によって着脱する足袋で、特徴は足首の筒が長いことである。筒の前部を開いて着脱し、その前基部につけられた2本の紐を筒部に巻き込んで用い、幕末には片紐になり、現在では姿を消してしまった。（図3、紐足袋）

図3 紐足袋



(2) ボタン足袋

着脱に便利なボタン掛の足袋が西鶴の「好色一待男、巻四」に「足踏は白綸子に紅を付け、ぼた

ん懸にして」とある。初期のものは、前部の内甲にボタンを付け、外甲にボタン穴をあけて、留めていたが、のちには後部を開けて、ボタンと乳をつけている。宇津家遺品に見られる足袋では、ボタンは共布で綿をくるんで玉にしたものである。

(3) こはぜ足袋

靴(コハゼ)はその字の通り、革製のものを上下閉じ合わせたもので、小鉤、甲馳の字も使われている。元禄時代の書「五元集」に「沓足袋や、こはぜに残る初桜」とあり、この頃から、こはぜが一般に用いられていたことがわかる。中国で象牙、鯨のひげ、魚の骨などで、財布の爪或は留具として用いられていた物が、日本で足袋に応用され、その後真鍮製となり、金属の延べ板の周囲にふくりんが付けられた現在のこはぜとなったようである。こはぜは普通三枚～四枚で五枚のものもある。(図4, コハゼの足袋)

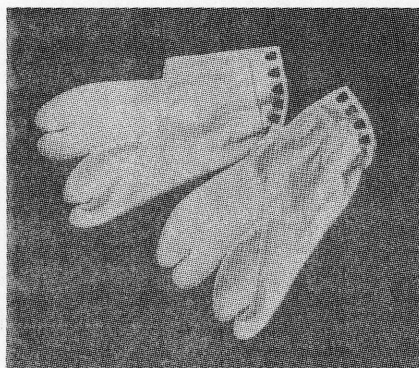


図4 コハゼ足袋

(4) その他の足袋

江戸時代の地下足袋は、刺底、石底であったが、明治末期にはゴム底の地下足袋が作業用履物として利用されるようになった。旅行用には、丈夫に補強された大津足袋がある、これは足を痛めないように底の周囲を外縫したものである。

5. 足袋のサイズと素材

足袋の寸法は文数で表示され、一文は寛永通宝(図5), 俗に鑿^{ヒツ}銭^{セン}の直径にあたり、鯨尺六分四厘(2.4cm)である、更に一文は三分、五分、七分と三段階に細かく分けられた。

年令に応じて豆足袋(六文半まで)、相型(七文から八文半まで)、大人物(八文七分以上)に分類された。(メートル法による足袋文数表参照)(図6)

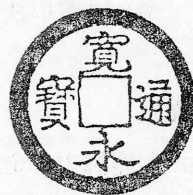


図5 一文銭

図6 メートル法による足袋文数表

21cm	21.5	22	22.5	23	23.5	24	24.5
8文7分	9文	9文3分	9文半	9文7分	9文8分	10文	10文3分

足袋の素材として、古くは、熊皮、鹿皮、猿皮が用いられた。現在では表地には、木綿の平織が最も多く、絹地では羽二重が使われ、日常用にはピロード、別珍、コール天などの色物(赤、紺、青、緑、紫、海老茶、蕉茶)もあるが、白生地足袋が最も普通である。

細—特別に細い足袋
柳—細めの普通足袋
梅 —やや甲高の足袋
牡丹—特別甲高の足袋

6. おわりに

日本人程、外国の文化を際限なく取り入れ貪欲に消化した国民は無いと思う。これが今日の経済発展を築いた要因であり、日本人の優れた特性である。然し反面、その故に自主性を喪失し、良否の見境もなく外国の風習を模倣し、ファッションに溺れ、生活様式を複雑にしていることも否定できない。好奇心が強く、絶えずハングリーであることは、発展に欠かせないメンタルな要素であるが、限りなく利益を追求して人に迷惑をかけ、他人の商業政策に乗せられて浪費に陥り易い。大部分の人が、余裕のある限り、和洋折衷の優雅な生活を送り、花嫁さんのように毎日お色直しをしたいと思っているのではなかろうか。最近の経済調査で、一人当りの平均年間収入に対する繊維製品の消費量は、日本人が世界最高であることが判った。これには高度経済成長による贅沢指向や生活様式の多様性等色々の要因が考えられる。最近諸種の式典、祭典の折には、若い人達のバラエティーに富んだ服装、特に華麗な和服姿が目立つようになった。今や、和服からは、普段着の性格が薄れ、高価な晴れ着という印象を受ける。チョン髷、着物姿のお相撲さんや、日本髪を結った花嫁さんのようなパーフェクトな和装には或る種の落着きと風雅さを感じず、洋装のヘアスタイルでも和装に自然に調和して異和感すらないのは、見馳れているせいであろう、然し安易に見過せないのは足もとである。和服に靴、洋服に草履では不恰好である。草履も着物と同様に華美になったが、足袋はあまり変わっていない。元来人間の足は走るのに最適の構造とは思えないが、足の指は挟む機能を残している証拠であろう。日本の履物は、この機能を利用し、助長するのに役立っていると言える。和服の短所は運動性に欠けることであり、足袋の軽快さと指袋は、この短所を補って余りある単独の長所である。

参考文献

- 江戸服飾史 金沢康隆著 青蛭書房
- 服飾百科事典 岩崎美術社
- はきもの 潮田鉄雄著 法政大学出版局
- 日本風俗史事典 弘文堂
- 装いと日本人 樋口清之著 講談社
- ミセス全集（着物通） 文化服装学院出版局
- 服飾事典 文化出版局
- 衣生活（1981, No 3） 衣生活研究会
- かぶりもの、きもの、はきもの 宮本馨太郎著 岩崎美術社